

新聞投書にみる文体の効果

—「ですます体」と「非ですます体」の混用を通して—

熊 谷 滋 子

1. はじめに

まず、次の短いエッセイを読んでいただきたい。

ユーモアについて。〈どの国民も彼らが最も恐れるものと同時に最も感心するものを笑う〉。きのう早朝亡くなった河盛好蔵氏の『エスプリとユーモア』（岩波新書）から。

アカデミー賞の「アメリカン・ビューティー」がまさにそう。アメリカが誇る「中産階級の家庭」崩壊を笑う。監督は「ユーモアの原産地イギリス」（同書）の演出家でした。

河盛著ですが、「笑い」についてきまじめに論じた好著です。

（「素粒子」『朝日新聞』2000年3月28日夕刊）

このエッセイの文末部分特に、4行目（「～を笑う」）と4～5行目（「～でした」「～です」）に注目してみると、いわゆる「だ・である体」と「ですます体」の両方が使われている。言語研究では、一つの文章の中にこのような複数の文末表現が混在している現象を混用と呼んでいる。上でみたような、文末表現が複数存在している日本語において、混用現象はそれほど驚くにあたらない。言文一致運動が叫ばれていた明治時代には、今日以上に多くの文末表現があり、一つの新聞においても、実に様々な文末表現が紙面をにぎわせていたという。⁽¹⁾

本稿では、書き言葉、特に新聞投書（以後、投書とする。『朝日新聞』の投書欄「声」）を対象に、文体の混用の特徴を探っていきたい。

2. 先行研究

上述したような混用について、野田（1998）が独自の考察を行なっている。野田によると、混用をめぐる研究は、「混用を例外的な現象とする」1960年代以

前から続いている考え方と、「敬語のレベル・シフトととらえ」、その意義を認める、1980年代から提案されている考え方の、大きく2つがあるという。本稿は、混用を例外的な現象とはとらえず、しかし、混用現象を単純に「敬語のレベル・シフトととらえる」立場もとっていない。また、後述するような野田の立場、つまり、文の内容と文体（「ですます体」かどうか）を一義的に関連づけてとらえる立場にもたたず、文末表現が文脈によっては、丁寧さの観点からだけでは規定できない様々な効果をもち、投書における書き手の心理、またはその動きを示す効果的な表現方法の一つであることを論じてみたい。

ここで、文体をめぐる用語についてあらかじめふれておきたい。本稿では、従来いわゆる丁寧体とされてきたものと敬語の丁寧さとの混同をさけるため、「ですます体」と、「非ですます体」という分類表現をとりたい。「丁寧体」という表現には、その文体が「丁寧」であるという価値付けがあるように思われるからである。したがって、本稿では、「丁寧体」という表現は使用しない。

野田（1998）では、「ていねいさ」から文章・談話をとらえ、文体と「聞き手に伝達する意識」の有無、さらには、文の機能との間に相関関係があることを指摘している。そこでは、「聞き手に伝達する意識」の有無を手がかりに、文を5つに分類している。「従属文」⁽²⁾「事実文」（事実を表す）と「聞き手に伝達する意識のないまま、自分が思ったことを述べる」「心情文」は、「非ですます体」で表現され、一方、「聞き手に伝達する」「伝達文」（質問や命令）と「聞き手に主張する」「主張文」（判断や説明）は「ですます体」で表現される傾向にあるとしている。大まかにまとめると、「聞き手への働きかけ」があると「ですます体」で、そうでなければ「非ですます体」で混用される傾向にあるという。

また、野田は、「ていねいさ」という観点から、「ていねいさ考慮調」（「ですます体」と「非ですます体」）が「特定の聞き手がいる話しことば」に使われ、「ていねいさ非考慮調」（「非ですます体」）が「特定の聞き手がない書きことば」に使われるとして、話しことばと書きことばを区別している。

以上のような野田の所説に対して、次のような疑問を覚えるのである。まず、「聞き手に伝達する意識」についてである。今回調査対象とするのは投書であるが、書き手はどのような文体で表現しようと、読み手に伝達する意識は十分にあると思われる。「ですます体」で書こうが、「非ですます体」で書こうが、読み手に自分の考えを伝達しようとしているはずである。したがって、野田の所説は、すべての文章にわたって一般化しうるものかどうか疑問に残るのである。

また、話しことばと書きことばを「ていねいさ考慮調」かどうかで区別しながらも、野田 (1998) のあげているデータは、新聞の通信欄、小説、インタビューの書きおこしたものなど、多岐に渡ってはいるものの、すべて書きことばからのものである。もし、「ていねいさ考慮」を「聞き手へ伝達する意識」とのからみで論ずるのであれば、話しことばからのデータの方がふさわしいのではないだろうか。

本稿では、投書を対象に文体の混用の実態をつかみながら、野田 (1998) の指摘するように、「聞き手へ伝達する意識」の有無と文体とが強い相関関係をもっているかどうか具体例をみながら検討していきたい。繰り返しになるが、投書という談話を取り上げた場合、むしろ、文脈によって様々な意味合いをもち、書き手の心理の変化が混用を通してかいまみることができるのではないかということ論じたい。そのうえで、投書では、混用される文の出現位置になんらかの関係があるのではないかということも考えてみたい。さらに、書き手の性と文体の混用状況についても考察したい。

3. 投書における混用の調査方法

本稿では、新聞の投書（『朝日新聞』東京版の「声」の欄に、1999年12月より2000年7月まで掲載された全投書）を調査対象とする。調べるものは、野田の分類を採用し、以下の2つのタイプについて行なう。名詞止め文等については、今回扱わない。

- a) 「非ですます体」を基本とした文章に、「ですます体」の文を混用している投書
- b) 「ですます体」を基本とした文章に、「非ですます体」の文を混用している投書

混用のある投書の数を投稿者の年代別、性別で提示し、さらに、混用された文の出現位置について考えてみたい。出現位置については、便宜上、投書の最初の文、最後の文、最後の段落、それ以外の中間部分とに分けてまとめたい。ただし、一つの投書に混用された文が複数あっても、一つとみなす。

4. 投書における混用の調査結果

表1 混用のある投書数

()は%

年齢	性	a)タイプ		b)タイプ		全投書	
		男	女	男	女	男	女
10代		0	0	0	5(8.4)	20	59
20代		3(7.5)	5(6.1)	0	9(11.1)	40	81
30代		2(2.6)	8(5.5)	2(2.6)	19(13.2)	75	143
40代		2(2.2)	5(2.2)	3(3.4)	8(3.6)	88	218
50代		5(3.6)	10(9.0)	3(2.1)	13(10.7)	137	121
60代		4(1.4)	4(3.9)	4(1.4)	7(6.1)	276	102
70代		3(2.2)	3(4.4)	1(0.7)	7(10.4)	134	67
80代		1(2.2)	0	1(2.2)	1(7.6)	45	13
90代		0	0	1(25.0)	0	4	5
混用合計		20	35	15	68	819	916
全投書に対する割合(%)		2.4	3.8	1.8	7.4		

表2 (1) 混用される文の出現位置

()は%

	最初の文	最後の文	最後の段落	中間	その他	混用投書合計
a)タイプ						
男	3(15.0)	10(50.0)	4(20.0)	3(15.0)	0	20
女	2(5.7)	15(42.8)	6(17.1)	9(25.1)	3(8.5)	35
b)タイプ						
男	1(6.6)	2(13.2)	1(6.6)	9(60.0)	2(13.3)	15
女	5(7.3)	4(5.8)	0	55(80.8)	1(1.4)	68

(2) 最後か中間か

()は%

	最後の文+最後の段落	中間
a)タイプ 男	14 (70.0)	3 (15)
女	21 (60.0)	9 (25)
b)タイプ 男	3 (20.0)	9 (60)
女	4 (5.8)	55 (80)

表1より、全体として、女性の書き手による投書に混用が多い。男性が上回ったのは、a) タイプでは20代、b) タイプでは90代だけである。ただし、90代の男性による投書の混用例は、全体の投書数も少なく、1通しかないため、数の上で考慮に入れるかどうか迷うものである。特に男女差が激しいのはb) タイプである。男性は、全体的に2%前後で安定しているが、女性の場合、混用数が10%越えたのは、20代、30代、50代、70代である。

表2より、男女ともに共通して、a) タイプでは、「ですます体」の文が出現するのは、最初か最後の文や段落に多く、一方、b) タイプでは、「非ですます体」の文が出現するのは、投書の中間位置に多いことがわかる。

5. 考察

5. 1 「ですます体」と主張文、伝達文

まず、先行研究にそって、野田(1998)が指摘している、主張文、伝達文が「ですます体」で混用される点について、以下の例からあてはまらない例があるということを見ていきたい。a) タイプから、「ですます体」が主張文、伝達文とはいいにくい文に混用されているもの、また、b) タイプから、「非ですます体」が主張文、伝達文と思われるものに混用されている例をあげてみたい。混用部分を中心に例示し、例を豊富にあげるため、それ以外の部分は大幅に省略した。下線部が混用された文を示している。「 」内は投書のタイトル、かっこ内は、投書の掲載された年月日、投稿者の性、年齢を示している。まず、a) タイプからみてみよう。

a) 1 「夢に終わった東京見物の杉」(2000.4.5 男性、63歳)

花粉症の季節、杉やヒノキが悪玉になっている。(中略)

母が亡くなって九年たち、父も昨年、母を追ったのは同じ季節でした。

a) 2 「今の世の中に女人禁制とは」(2000.2.13 男性、51歳)

新しく大阪府知事となった太田房江氏が就任の記者会見で、三月の大相撲春場所千秋楽での府知事賞授与のため、土俵に上がる意欲を示した。(中略)

男女雇用機会均等法の導入を機会に、働く社会での男女間格差はなくなってきています。多くの分野に女性が進出しています。新幹線には女性運転士が登場します。単純な比較は出来ないにしても、あまりにも対照的ではないでしょうか。

開かれた相撲界にするよう、時津風理事長には女人禁制としない英断を望みたい。

a) 3 「現代の子守歌あればいいな」(2000.3.16 女性、79歳)

一月に、ひ孫が生まれた。私にとって初めてのひ孫だ。元気にすくすく育っている。(中略)

だったら、今の時代に合った子守歌をつくって下さいと、作詞・作曲の先生方をお願いしたい。母親(父親)が、子どもを抱いたまま歌える歌があったらいいなと思うのです。

a) 1については、下線部は伝達文、または主張文とはいいいにくく、ある種の感慨を表現しているように思われる。a) 2については、後半部分に「ですます体」が混用されているが、最後の文(「開かれた～」)にも書き手が主張したいことが表れているのではないだろうか。さらに、a) 3は、最後の文だけではなく、その直前の文(「だったら、～」)もまた、伝達、主張の色の濃い内容なのではないだろうか。

次に、b) タイプについてみてみよう。

b) 1 「論議起こした都知事の功績」(2000.2.15 男性、50歳)

拝啓 石原都知事様

(前略)

[第4段落の2文目] 都知事の外形標準課税の構想に、「騒ぎを起こす人だな」という金融再生委員長の感想がありました。(中略)

どうぞ、都から国を変えるという言葉の魅力、魔力にもっと酔って、心おきなく騒いでいただきたい。

願わくは、この税に反対する側も「遺憾である」などで濁さず、力のある言葉で対してほしい。

b) 2 「特別ではない授からない人」(2000.4.8 女性、33歳)

私は不妊治療を始めて七年目になります。人工受精、体外受精とトライしましたが、いまだに子供に恵まれていません。(中略)

[最後の段落の2文目] マスコミで少子化イコール産まない人の図式が報じられると、不妊の私たちは疎外されている気がします。少子化の背景には、

不妊のカップルが増えている側面もあることを考えて欲しい。

b) タイプの例では、「どうぞ、～いただきたい」「～ほしい」という表現から分かるように、「非ですます体」で混用されているものも、書き手の最も言いたいこと（主張）が表現されていると思われる。

以上、投書を見るかぎり、野田のいう伝達文、主張文が必ずしも「ですます体」で混用されているわけではないことがわかる。つまり、文体と文の内容が一義的に決定できないのではないかということである。書き手の心理（の動き）が、全体の基本の文体の中であって、混用によってなんらかの強調がなされ、状況によって様々な意味合いを帯びてくるのではないだろうか。さらに、野田（1998）は、ていねい調（ここでいう「ですます体」）が基調の文は主張、伝達文が中心に書かれ、中立調（ここでいう「非ですます体」）が基調の文が事実文を中心に書かれているという指摘も、投書にはそれほどすんなりとあてはまらないとおもわれる。投書においては、ていねい調でも中立調でも、事実を表現したり、書き手の主張が表されているからである。

5. 2 混用される文の出現位置

前述したように、文体と文の内容の間にはそれほど対応関係があると言いきれないが、投書における混用の特徴をみると、表2で示したように、a) タイプとb) タイプにおいて、混用される文の出現位置にある傾向が存在するようにみえる。まず、a) タイプでは、「ですます体」が最後の文、または、最後の段落に混用される割合が高く、全体の6～7割を占めている（表2(2)を参照されたい）。「非ですます体」で表現しながらも、終わりの部分の一つの談話の区切りとして意識され、「ですます体」で締め括るのではないだろうか。さらに特徴をこまかくみても、最後の文で「ですます体」を混用している例をみても、投書のしめくくりにあたって、書き手のまとめやコメントが述べられていることが多くみられる。

a) 4 「いまどき携帯持たない理由」（2000.2.2 男性、21歳）

僕は、もうすぐ大学四年生になる。三年ほど大学生をやってきたのだが、僕はこれまでケータイ（携帯電話）を持ったことがない。（中略）

僕がケータイを持たない理由、それは、まだまだ僕が弱い人間だからです。

a) 5 「20歳のパワー信じています」(2000.1.22 男性、54歳)

成人式での若者のマナーの悪さを、静岡市長が憤慨。来年の式典を「続けるべきかどうか疑問」と、もらしたことが物議を呼んでいる。(中略)

二十歳のパワーを信じています!

a) 6 「保育の子らとスキンシップ」(2000.1.17 女性、51歳)

昨年の九月から保育園の時間外パートを始めた。(中略)

朝と夕方の二往復、保育園まで片道二十分の自転車通いはちょっとハードだけれど、心が明るく元気になれる大切な時間なのです。

a) 7 「演奏の贈り物障害児たちに」(2000.7.8 女性、46歳)

先日、町民会館のホールを借りてコンサートを開いた友人がいる。(中略)

今年の梅雨は、このコンサートのお陰で心さわやかな私です。

ちなみに、最初の文で「ですます体」を混用する例は、書き手が投書を書くきっかけとなった読み物や発言に言及することが多い。

a) 8 「子育て文化を取り戻さねば」(1999.12.16 男性、80歳)

六日の本紙「きょういく」のページに載っていた汐見稔幸・東大助教授の「社会そのものが育児の能力を失いつつある。文明が栄える一方で、子育て文化がやせ細ってしまった」との意見に全く同感です。(以下略。「非ですます体」)

a) 9 「過大な薬業務看護婦の背に」(2000.5.2 女性、44歳)

先日の声欄の投稿で、薬に対する看護婦の知識不足が指摘されていたが、薬に関する業務をどれほど看護婦が請け負っているのか、ご存じでしょうか。

(以下略。「非ですます体」)

次に、b) タイプの混用について考えてみると、投書の中に位置していることが多く、いわば、書き手の論が展開されている部分に混用が見られる。展開部分での、「非ですます体」の混用は、野田らが指摘しているような、「従属文」などにも用いられ、さらに、その断定的、簡潔な響きより、時にその内容に強さを与えたりしながら、事柄を列挙する場合、「～という」などで引用する場合、

さらには、臨場感、現実、実態、本音などが表現されていることが多い。しかし、これも一概に、文体と内容を一義的に結びつけることはできず、展開部分にみられる傾向にすぎない。

b) 3 「体質を示した『談合』の組閣」(2000.7.6 男性、48歳)

森新内閣は、談合と年功序列の情実人事としか言いようがありません。政権与党である公明と保守に1人ずつ枠を与え、自民党内では各派閥で人数を割り振る。これはまさに談合です。(以下略。「ですます体」)

b) 4 「小渕氏の病状正確な発表を」(2000.4.19 男性、66歳)

内閣法では首相の臨時代理になれるのは、あらかじめ指定された国務大臣と定められています。(中略)

[第3段落目の2文目] 青木長官は三日午前の会見で、医師の診断結果について「そこまで詳しいことは申し上げる必要はないと思う」と公表を拒んだ。医師団の発表は意図的に抑えられているのではないか。国民には首相の病気について知る権利があり、政府には知らせる義務があるはずです。(以下略。「ですます体」)

b) 5 「食べ物捨てる『豊かさ』とは」(1999.12.16 女性、17歳)

私は、コンビニエンスストアでアルバイトを始めました。(中略)

[第3段落目] 私たち以上に、ひもじい思いをしている方たちは世界に、いや、日本にだってたくさんいることを知っています。日本の一部では食べ物を捨てていて、その一方では家もなく、貧しい思いをしている人がいる。それなのに、物を捨てるくらいぜいたくになった国を、果たして「本当に豊かな国」と言えるのでしょうか。(以下略。「ですます体」)

b) 6 「42歳の初体験クワガタ捕り」(1999.12.14 女性、42歳)

秋の訪れが遅かったお陰で、とてもすてきな体験を一つしました。(中略)

[第5段落目] いるいる、何だか分からないけれど、いろいろな虫がいっぱい。クワガタが姿を現すのを待っていると、すき間に体の一部をみせました。(以下略)

b) 7 「被災の浅草にお日様が出た」(2000.3.1 女性、67歳)

毎年、このころになると私の頭にこびりついて離れないことがあります。(中略)

[第2段落4文目] 母は弟を背に火を避けて川に一晩つかっていて、岸に上がった時、弟は虫の息、母自身も気を失ったという。(以下略。「ですます体」)

b) 8 「このままではヘルパー不足」(2000.4.2 女性、46歳)

パート勤務の合間をぬい、やっと手に入れたヘルパー二級の認定証。しかし、いざヘルパーとして働こうとすると大きな選択を迫られました。

[第2段落目] 二十四時間体制で三交代勤務か、日中だけの不定期の登録ヘルパーか。主婦には前者は無理ですが、後者は、移動時間は除外されての時給で、さらにヘルパーの仕事に欠かせない相談や打ち合わせの時間は、たいていの事業所では時給計算外です。(以下略)

以上、b) タイプでの混用は、投書の展開部分に出現し、その文末の響きから、b) 3では従属文として、b) 4やb) 5では現実や実態について表現し、b) 6では臨場感や驚き、b) 7では「という」という引用、b) 8では選択肢(あれかこれか)について、「非ですます体」で混用し、文を短く区切りながら、書き手の心情を効果的に表現している。

書き手の心の動きがさらに激しくなると、混用される文も1文や2文にとどまらず、全体を2分するような文末表現が使用されている。

(1) 「職員踏みつけ郵政官僚たち」(1999.12.23 女性、42歳)

郵政省所管の財団法人「郵政弘済会」が、発行する月刊誌の業務を出版社に丸ごと委託し、その出版社も更に下請けに出しているとの記事があった。

これを読んで、長年の不満が爆発した。(以上、前半2段落まで「非ですます体」)

民間は就職難、リストラ時代に公金の無駄使いは許されないのは当然ですが、それ以上に、物言わぬ約三十万人の郵便職員を踏みつけにする行為です。

(以下略。後半4段落は「ですます体」)

上の投書は、前半2段落は「非ですます体」、後半4段落は「ですます体」で

表現されている。郵政省のキャリア組の天下り状況への怒りを、郵便職員である夫の状況を通して切々と述べている。書き手の訴えている内容の深刻さは相当なものである。書き手の憤りが文体を大きく変えながら表現されている投書である。一方、下のような投書もある。

(2) 「農家のために頑張って仲人」(2000.1.9 男性、63歳)

私の息子は長男で、地方公務員です。そして、私たち夫婦は農業に従事して生計を立てています。

ところで、恋愛の出来ない息子に歯がゆさを覚えています。(中略。3段落途中まで「ですます体」)

[第3段落2文目] 結婚したら、今は絶対田んぼに入れないといっても、子供が出来たりすると家計のため農業の手伝いをさせられたりするのが嫌だから、農家の長男には嫁ぎたくないという。(中略)

仲人さん、農家の子供のため、何とか頑張って欲しいとお願いします。(後半5段落「非ですます体」)

(2)の投書は、(1)と違い、後半は「非ですます体」で表現されている。嫁不足を嘆いている投書だが、今の農家のかかえる問題を訴えている。もどかしさを文体を変えて表現している。どちらの文体を使用するにせよ、書き手の思い、心のゆれ(憤り、もどかしさ)がその文体を通して、滲みでてくるのではないだろうか。

5. 3 投書における混用と書き手の性

表1でみたように、投書の文末での混用は、女性の書き手の場合が多い。a)タイプとb)タイプを一緒にしてみると、男性の投書では、4.2%に混用がみられ、一方、女性の投書では、11.2%に混用がみられる。投書の文体、表現と男女差について分析した佐竹(1995)は、女性の書き手の方が、感情表現、口語的表現(例、～なんて)、会話文(「」でくくられた会話文)などを多用する傾向にあり、「女の方が喜怒哀楽の感情をそのままことばで率直に表現」し、「肉声で語っている」としている(1995:66)。今回調査した混用についても、このことがあてはまるのではないかと考えている。「ですます体」と「非ですます体」を混用することによって(意識するかしないかは別として)、結果的に書き手の心理、またはその動きがより率直に現されているのではないだろうか。

また、b) タイプの混用が男性に比べて多いことも特徴的である。投書文体と男女差についてまとめている熊谷 (1996) では、女性の書き手の方が、「ですます体」で表現する割合が高いとしている。そこではさらに、女性のみが投稿できる投書欄（「ひととき」『朝日新聞』）において、「ですます体」の使用率が、男女ともに投稿できる投書欄（「声」『朝日新聞』）のそれよりも下回っていることも指摘している。その理由として、女性は、異性（読み手）の前では、「ですます体」が「女らしさ」をしめすものといったジェンダー意識が作用するためではないかと結論づけている。

このようなジェンダー意識問題から、あらためて、「非ですます体」を混用する b) タイプの混用についてみていくと、「あるべき女性」の表現では、十分にその思いが表現しきれず、よりストレートな表現である「非ですます体」を使用してしまうのではないだろうか。このことを別のいい方で言い換えれば、「ですます体」が、依然として、「女らしさ」を示すものとなっていることがいえるのではないだろうか。

6. おわりに

以上、新聞投書における混用の特徴を探ってきたが、あらためて結論を再述しておきたい。第一に、混用において、文体と文の種類が一義的な関係があるとしている野田の所説は、投書の混用を見るかぎり、その妥当性はかならずしも一般化しうるものではない。また、「聞き手に伝達する意識」の有無についても、必ずしもあてはまるとはいいきれない。投書のような書き言葉においては、どちらの文体を使用するにしても、読み手を十分に意識してのことだからである。

第二に、投書にみられる混用の特徴として、混用される文の出現位置が a) タイプの場合、終わりの部分に多くみられ、締め括り部分として「ですます体」が使用されているものと考えられる。一方、b) タイプの場合、展開部分に多くみられ、その響きの簡潔さから、書き手の論の展開に際して、文を短く区切りながらペンを進めている。さらに、混用例が多いのは、女性の投書に多くみられることがあげられる。書き手の心理、またその動きがより率直に表現されているからではないかと思われる。

いずれにしても、投書を見るかぎり、文体と文の内容の対応関係は一概にとらえきれず、「ですます体」だから主張・伝達し、「非ですます体」だから心情を表しているとは言いがたい。

最後に、文体の混用は、話しことばには多く見られることは周知の事実だが、書きことばには、新聞投書が示しているように、それほど多くはない。同じ新聞でも他の面については、一貫して「非ですます体」で表現されている。⁽³⁾ 混用のある投書数は全体としてそれほど多くはないが、文末表現にみる混用は、新聞における投書の特徴のひとつではないかと思われる。一方、学術論文、小論文の指南書などには、「非ですます体」が基本とされている。卓 (1999:152) は、日本語と韓国語の研究論文を対象に、文末表現を比較検討し、結論として、研究者の「規範性」がみられるとしている。規範そのものが悪いわけではないが、しかし、書き手の気持ちを効果的に表現するためには、様々な文体の利用が認められてもよいのではないだろうか。

注：

(1)詳しくは、山本正秀 (1965)『近代文体の史的研究』の248ページ以降を参照されたい。

(2)従属文とは、後続の文に従属している文のことである。ある投書から例示しよう。

(前略)

延々と介護を続ける者が、元気でいられるわけがない。疲れても、気を取り直して続けている。周囲のだれに訴えても理解されない。せめて、ヘルパーさんに来ていただいて、その時間は私の望む家事をこなして欲しい。それが、介護する私を助けてくれることになるのです。(以下略) (「家事の援助も家族には必要」2000年2月4日付投書より)

3行目の「それ」の示すものが、直前の文(「せめて～」)であり、これを従属文という。

(3)新聞の第一面に、男性記者の署名入りのものが、「ですます体」(正確には混用 (b) タイプ)で表現されはじめた。(「座標」『朝日新聞』2000年6月6日付)新聞作成における文体に、新しい動きが感じられるものである。

参考文献：

- 足立さゆり 1995 日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト
拓殖大学日本語紀要 5 拓殖大学国際部 Pp.73-87.
- 平田由美 1999 女性表現の明治史 岩波書店
- 生田少子・井出祥子 1983 社会言語学における談話研究 言語 12-12
大修館書店 Pp.77-84.
- 金田一春彦 1982 日本語セミナー 第一巻、筑摩書房

- 熊谷滋子 1996 女の文体の移り変わり 人文論集 静岡大学人文学部 Pp.263 - 75.
- メイナード・K・泉子 1991 文体の意味—ダ体とデスマス体の混用について—
言語 20-2 大修館書店 Pp.75 - 80.
- メイナード・K・泉子 1997 談話分析の可能性—理論・方法・日本語の可能性—
くろしお出版
- 仁田義雄 1991 言表態度の要素としての〈丁寧さ〉 日本語学 10-2
明治書院 Pp.65 - 75.
- 野田尚史 1998 「ていねいさ」からみた文章・談話の構造 国語学 194 集 Pp.1 - 14.
- 野田尚史 1989 真性モダリティをもたない文 仁田義雄・益岡隆志 (編)
日本語のモダリティ くろしお出版 Pp.131 - 57.
- 岡本能里子 1997 教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—
日本語学 16-3 明治書院 Pp.39 - 51.
- 斎賀秀夫 1960 敬語の使い方 岩淵悦太郎編著 悪文 日本評論社
- 佐竹久仁子 1995 女の文体・男の文体—新聞投書を資料に— ことば
現代日本語研究会 Pp.52 - 68.
- 卓星 淑 1999 研究論文における文末表現の一考察 ことば
現代日本語研究会 Pp.147 - 61.
- 宇佐美まゆみ 1995 談話レベルからみた敬語使用—スピーチレベルシフト生起条件と機能
学苑 662 昭和女子大学近代文化研究所 Pp.27 - 42.
- 山本正秀 1965 近代文体発生の史的研究 岩波書店